

し わ す ざ き
紫 波 洲 崎 城 跡

宮崎市教育委員会 竹中 克繁

1. 概 要

所 在：宮崎県宮崎市青島 6 丁目（旧 大字折生迫）
比 高：約 60m（最高点標高 65m）
規 模：東西 150m、南北 140m
別 名：海江田之城？（『旧記雑録』後編）
表 記：『上井覚兼日記』中では「紫波洲崎」、「しわす崎」、「しはす崎」、「紫波洲崎之城」、『日向記』中では「紫波洲崎」

2. 沿 革

- ・記録上の初出は伊東氏の家譜『日向記』。文安元年（1444）前後に「加江田紫波洲崎」の長井式部少輔に対して、伊東祐堯配下の長井美作守が「同名のよしみで自分に城を明け渡して欲しい」との交渉を行う。式部少輔は「太刀ノツカニテ渡スヘシ」と開城を拒むが、最後には説得に応じて城を明け渡した。
- ・こののち「串間殿（野辺氏）」、次いで川崎五郎左衛門が加江田地頭（『日向記』）。
- ・文明 12 年（1480）に日高周防介（島津氏配下か）が紫波洲崎城を攻略。その翌日に伊東祐国が攻め寄せ、日高勢は城に火をかけて撤退（『日向記』）。
- ・以降戦国期に至るまで『日向記』中にも目立った記述はなく、永禄 11 年（1588）の「伊東四十八城」に名を連ねる。
- ・「伊東氏の豊後落ち（都於郡崩れ）」により、島津氏は天正 8 年（1580）に老中上井覚兼を宮崎城に入れる。覚兼は「日向国海江田之城所領八拾町」を島津義久から充行われ、以降紫波洲崎城には覚兼の父薫兼（恭安齋）が住する。
- ・天正 15 年（1587）の豊臣秀吉による九州平定の結果、紫波洲崎城を含む一帯は伊東祐兵（飢肥藩初代）が領有。
- ・慶長 5 年（1600）、関ヶ原合戦に連動した「稲津騒動」（伊東氏が東軍方とし

- ・西側土塁は、曲輪4から続く大型の堀切とセットになって、城域の境を形成。
- ・東側土塁は城南の迫に面し、対岸には曲輪2から派生した複数の帯曲輪もある。この迫は縄張の中で強く意識されており、大手口かと思われる。

【曲輪4】

- ・曲輪1とほぼ同高の極めて狭小な曲輪。
- ・南西は大型の堀切となり、その先に遺構はない。城域を区切る堀切と櫓台か。

4. 『上井覚兼日記』

- ・天正8年(1580)、島津家老中上井覚兼が領有(『旧記雑録』後編)。覚兼は宮崎城にあり、紫波洲崎城には覚兼の父母、祖母が住した。覚兼は頻繁に紫波洲崎城を訪れ、『上井覚兼日記』には多くの記事がある。
- ・『上井覚兼日記』では、宮崎城より紫波洲崎城の方が城内の構造について詳述。
- ・曲輪名としては「内城」と「中城(中之城)」。「恭安御館」という語も登場。
- ・主郭「内城」は曲輪1に比定。「恭安御館」も曲輪1にあり(「此晩、(中略)内城へ留候て、心静ニ恭安御物語承候也」(天正11年8月13日条)等)。
- ・「中城」は覚兼祖母の呼称でもある。両側に土塁を構えた曲輪3こそ主郭に次いで格式が高く、中城と比定するにふさわしく思われる。
- ※中間に位置する曲輪2が「中」の呼称に適しているが、曲輪1・3から見下ろされるその位置は、覚兼が父への挨拶を後回しにするほど敬った祖母の居所として違和感がある(同12年5月17日条)。
- ・茶室：覚兼自らが場所を選んで番匠に造らせる(同13年11月5日条等)。
- ・風呂：「(来客に対し)風呂焼せ候て会尺申候」(同12年6月9日条)等。
- ・「弓場之上之風呂焼せられ候由、恭安齋被仰候間参候」(同12年5月18日条)。
→恭安齋が準備をして覚兼を招いており、風呂は曲輪1にあったと思われる。
→風呂は弓場の上の空間に位置。城内であれば、弓場は曲輪1の下に位置する曲輪2に比定(曲輪2は長軸30m強。弓道に定められた近似的距離に近い)。

【引用・参考文献】

- 東京大学史料編纂所編 1954・1955・1957『大日本古記録 上井覚兼日記』上・中・下 岩波書店
- 宮崎市青島地区公民館 1970『郷土誌青島』
- 宮崎県編 1999『宮崎県史叢書 日向記』宮崎県
- 宮崎県教育庁文化課編 1999「紫波洲崎城」『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ宮崎県教育委員会

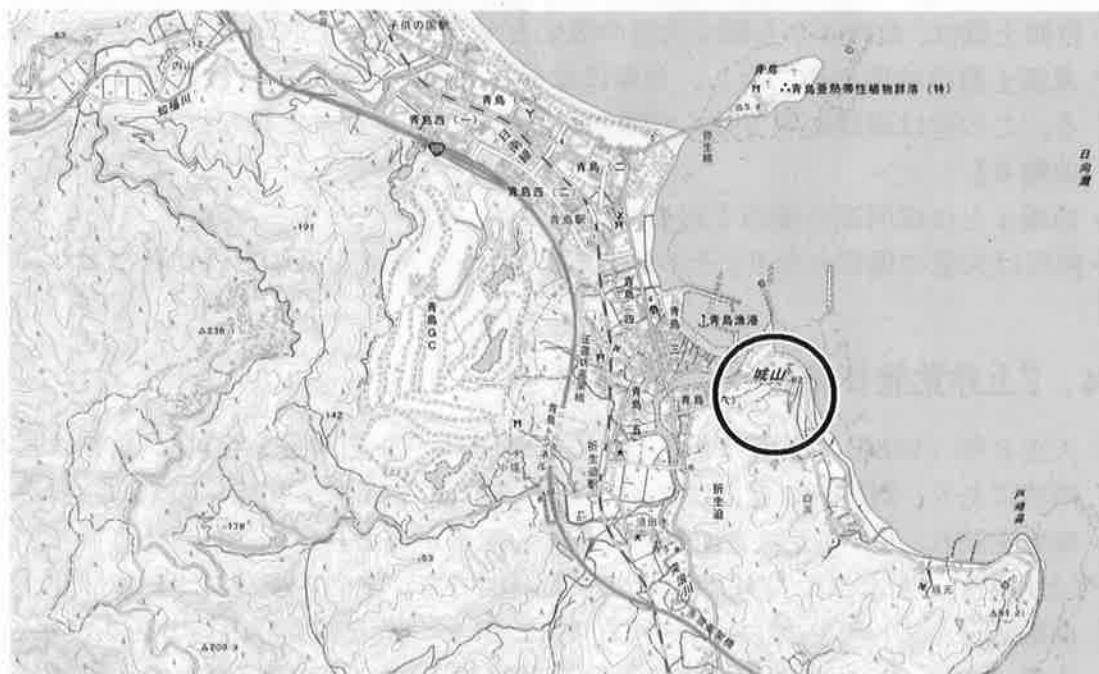


図1 紫波洲崎城跡位置図（スケール任意、天が北。地理院地図）

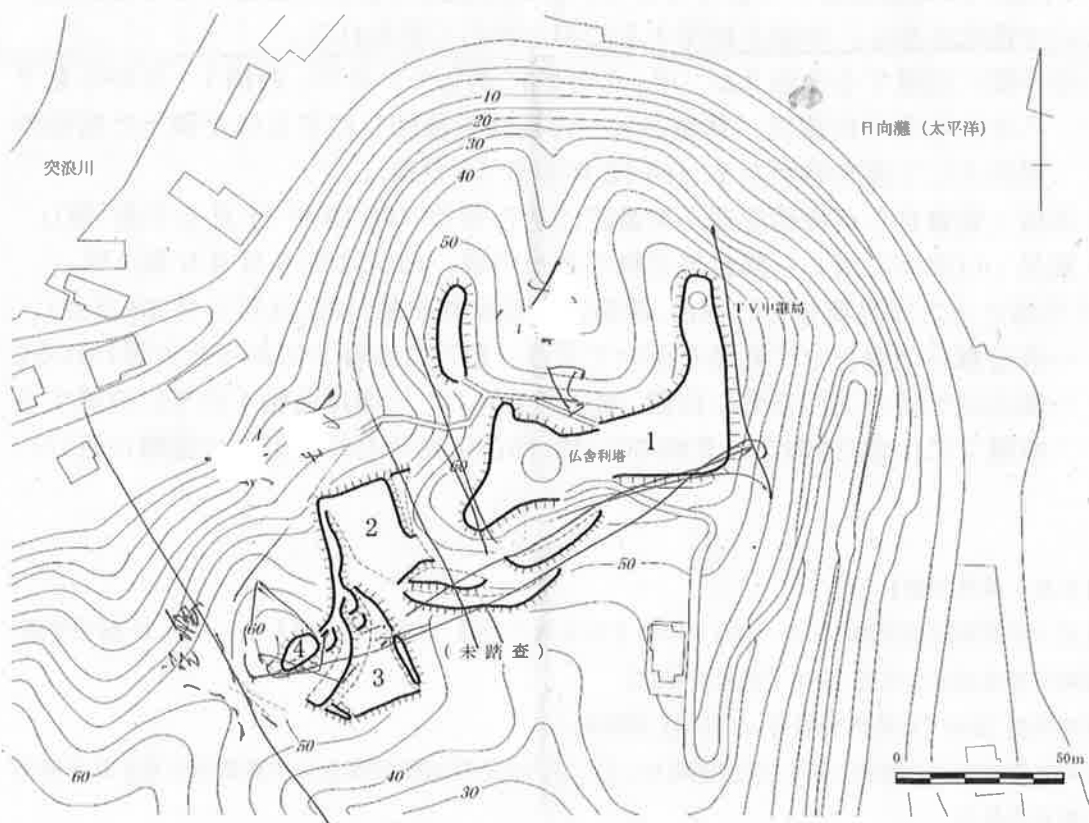


図2 紫波洲崎城跡縄張図（竹中作成 ※未公表、近刊掲載予定）